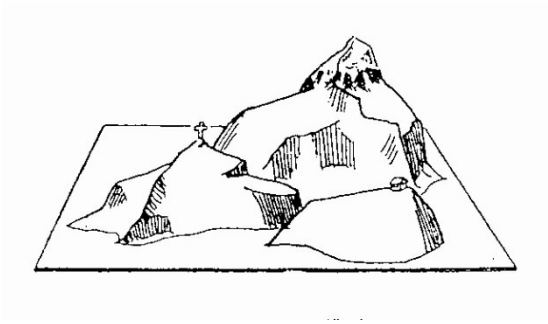
コラム 3-3　心の理論と視点取り：ピアジェの 3 つ山問題

4 歳頃になると「心の理論」が発達し，他の人が自分とは異なる意図や欲求をもっていることを理解できるようになります。これとちょうど同じ時期に，空間的な視点でも，他の人の視点（対象が他の人の位置からはどのように見えるか）を理解することができるようになることが以前から知られていました。この他者の視点で対象を見ることを「視点取り」（perspective taking）と呼びます。

この現象について，ピアジェ（スイスの心理学者）は，下のような 3 つの山の模型を子どもに見せ，子どもが見ている位置とは別の場所（たとえば，子どもが正面から山の模型を見ていたら，90 度右側）から見たら，3 つの山の配置はどう見えるかを尋ねました。4 歳になる前の子どもは，自分が見ているものを，別の位置からどのように見えるかを答えることができませんでしたが，4 歳を過ぎると，自分と違う場所から見た場合についても答えることができることがわかりました。このように，自分以外の（他者の）視点から，対象がどのように見えるかを考えることを「視点取り」と呼びます。この視点取りができるようになる以前では，外界を自分の視点からしか認識できないことから，ピアジェは，これを「自己中心性（egocentrism）」と呼びました。ピアジェは，この外界の物的対象の認知のしかたを基準に，心的世界においても 4 歳以前は自己中心的な認知が起こっていると考えていました。



物的な対象の認知における視点取りと，心の理論のような人的状態の（ある種の）視点取りは，現象的には共通して見えます。しかし，他者が見ている視覚像を理解すること（視点取り）と，他者の意図や感情を理解すること（心の理論）は，認知的なモデルとしては（記号化すれば）共通のように見えますが，人間の脳の中では，別の処理がされていることがわかっています。私の研究室でやっている研究を紹介しましょう。

それぞれの認知処理を課題として大学生に PC 上でやってもらうと，心の理論と視点取りという 2 つの認知処理課題の成績には，あまり関係がないことがわかりました。つまり，一方の課題の成績がよくても，他方の成績がいいとは限らないのです。

さらに興味深いのは，視点取り課題でディスプレイに，ある物体を人が見ている画像を提示したときと，同じ場面で人をカメラに置き換えた画像を提示したときでは，その見え方の理解（同じ位置から人が見た対象とカメラで撮影した対象の見え方の理解）を男女で比較すると，正確さの程度が異なることがわかりました。課題の成績は，平均すると，女性は「人が見ている」条件での成績がいいのに対して，男性では「カメラが撮影した写真」条件での成績がいいという結果が出ています。不思議ですが，面白いですね。

サリーとアンの課題で，人形劇を見ている自分と，サリーの視点（頭の中のボールの場所）が違うことを区別できるようになった時期と，物理的な対象の見え方について自分と他人の視点を区別できるようになるのが，同じ幼児期の中頃であるという事実は，いずれも基礎的な認知発達が背後にあることを示しているためであると考えることができます。